

稲発酵粗飼料栽培におけるイネツトムシの防除適期		
[要約] 稲発酵粗飼料栽培におけるイネツトムシの防除適期は、圃場に発生するイネツトムシの8～9割が若齢～中齢で、1枚～数枚の葉をつづった小さなツトが主に見られ、葉の食害がまだ軽微な時期である。		
農業総合センター農業研究所	成果区分	普及(情報)

### 1. 背景・ねらい

稲発酵粗飼料栽培ではイネツトムシの発生が多く、特に第2世代幼虫により葉が甚だしい食害を受ける。そこで、これらイネツトムシに対し薬剤散布時期を変えて防除を行い、防除適期を検討する。

### 2. 成果の内容・特徴

1) 平成16年のイネツトムシの発生は、第1世代成虫によるイネ葉への産卵が7月上旬から中旬にかけて認められ、第2世代幼虫の発生は7月中旬から認められた。イネ葉の食害が甚だしい老齢幼虫の発生のピークは7月下旬～8月上旬にかけてであった。卵～ふ化期，若～中齢期，老齢期に、カルタップ水溶剤(75%, 1500倍)またはカルタップ粒剤(4 kg / 10a)を用いて防除を行った(表1)。

2) 若～中齢期に薬剤散布を行うと、防除効果が最も高い。収量も他の処理時期に比べて最も高く、イネツトムシの防除適期は圃場に発生するイネツトムシの8～9割が若～中齢で、葉の食害が軽微な時期である(図1)。

3) 卵～ふ化期の薬剤散布では、若～中齢期の散布に比べて防除効果はやや低い。防除後も新たに幼虫がふ化したためと考えられ、収量はやや低くなる(図1)。

老齢期の薬剤散布では、幼虫に対する薬剤の効果がやや劣る。また既に食害を受けているため収量も低下する(図1)。





### 3. 成果の活用面・留意点

1) イネツトムシの発生時期は年により変動するので、発生状況に留意し、防除時期が遅くならないよう適期を判断する。

2) カルタップ水溶剤、カルタップ粒剤ともイネツトムシに対し登録があり「稲発酵粗飼料生産・給与技術マニュアル」(平成14年3月、稲発酵粗飼料推進協議会ほか)に、稲発酵粗飼料で使用できる農薬として記載されている。

4. 具体的データ

表1 防除時期と圃場のイネツトムシ発生状況

防除時期	散布日	圃場のイネツトムシ発生状況
卵～ふ化期	7月16日	圃場で成虫が多く飛びまわっているのが見られてから数日後。卵が4割、若齢幼虫（体長5mm程度）が4割の時期。葉の食害はほとんど見られない。  <p>成虫と卵</p>  <p>ふ化直後の幼虫の葉先を巻いたツト</p>
若～中齢期	7月23日	若～中齢幼虫（体長20mm程度）が8～9割の時期。葉の中央部を巻いたツトや、数枚の葉をつづったツトが主に見られる。大きなツトも見え始める。葉の食害は軽微。  <p>若～中齢のツトと幼虫</p>
老齢期	7月30日	老齢幼虫（体長30～40mm）が8割、蛹1割。大きなツトが多く見られ、既に葉の食害が甚だしい。  <p>老齢のツトと幼虫</p>

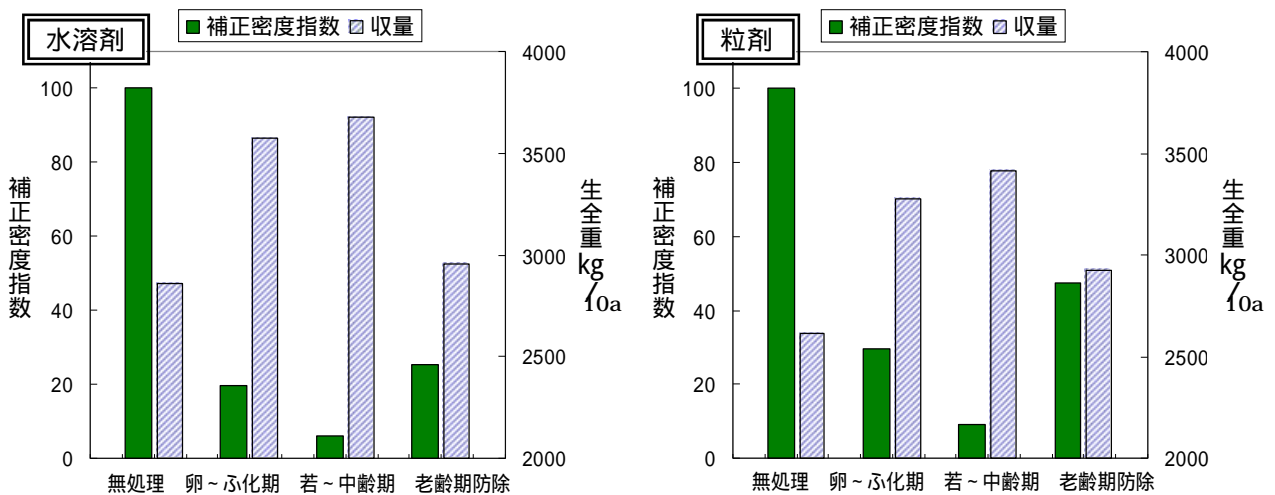


図1 薬剤散布時期とイネツトムシ防除効果

補正密度指数 =  $\frac{\text{処理区の散布後虫数} \times \text{無処理区の散布前虫数}}{\text{処理区の散布前虫数} \times \text{無処理区の散布後虫数}} \times 100$   
 品種：クサホナミ。  
 防除後調査時(8月4日)の無処理区の虫数：  
 水溶剤区 41頭/10株、粒剤区 33頭/10株。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

飼料イネにおける主要病害虫の発生実態の解明と防除対策の確立・平成16～18年・病虫研究室